

ハイデル・フォーラム21 drupa 報告会

ペーパーメディアの価値と可能性を探る

—経験の数値化と美意識を実感

(株)篠原紙工 代表取締役 篠原慶丞氏

ハイデルベルグ・ジヤパンのハイデル・フォーラム21「第84回関東甲信越静地区会」が7月18日に東京・高輪のTKPガーデンシティで開かれた。5月28日から11日間、ドイツ・デュッセルドルフで開催されたdrupa 2024

(国際印刷・メディア産業展)を振り返り、会場を視察した3者から報告が行われた。そのうち、ハイデル・フォーラム21のポストプレス研究会会長を務める篠原慶丞氏(有限会社篠原紙工 代表取締役)は「イノベーションとリデザイン～ペーパーメディアの未来を創る」と題して、製本のプロから見たペーパーメディアの価値と可能性について語った。

篠原氏は今回が初めてのdrupa訪問で、会場を回ったのは5月31日～6月3日の4日間。主に30社ほどのブースを時間をかけて詳しく見た。その後、オランダの製本会社も視察に訪れた。

かねてより、ヨーロッパ企業が作るプロモーション製品に対して、「カッコいい」と思うと同時に「悔しい」と篠原氏は感じてきた。

「常識外れのものづくりでありながら、見せ方が上手。やられた、と感ずることが多かった。今回のヨーロッパ訪問では、そもそも『紙』や『印刷物』『ポスト



講演する篠原氏

プレス』の価値とは何か? それをテーマとした。drupaに出展されていた機械は、あくまで価値を生むための手段として見ていた」

感じたのはエネルギーの強さ。会場も、街も、理想に向けて突き進むエネルギーにあふれていた。なおかつ、人手不足などの現実はしっかりと受け止めて、前向きに課題に取り組んでいる姿が印象に残ったという。

▶ 紙の可能性はいろいろ

視察したブースの報告を行う前に篠原氏は、自身が考える紙の本の価値について、5つの視点から具体的な製品に沿って紹介した。その5つとは「間接的な伝え方」、「最適なフォーマット」、「経年変化」、「体験をともなう情報」、「所有満足」。

「最適なフォーマット」では、写真の迫力を活かすB4見開きのパノラマ写真集を例に挙げた。

「経年変化」では、自身が愛読する谷川俊太郎の詩集の表紙について、「表紙にきれいな箔が施されているが、何度も手に取り、時間が経つにつれて箔が少しずつ剥がれてくる。その剥がれ具合が、時の流れや自分の心の移り変わりを感じさせて一種の味わいになる」と話した。

「体験をともなう情報」で紹介したのは、モーションシルエット絵本を親子で読んでいる動画。影を自分で動かしながら絵本を楽しめる体験が新鮮だ。

また、篠原氏は「紙を触ると手の熱が奪われる。アート調の紙では冷たく感じ、マット調の紙だと温かく

感じるのは皆さんも日頃体験されていると思う。物理的な特性を考えた紙の選び方など、同じ情報でも人に与える印象は大きく変わってくる」と紙の可能性について話した。

▶ 立体物を意識したデザインが浸透

視察したブースの中からは、Landa, haris & bruno, PERET, Hermans, Ochsnerの5社を紹介した。

Landaブースの入口では、印刷方式による廃棄物の量の違いを、実際のゴミを置いて対比させて見せていたことにまず驚いたという。オフセット印刷と比べてデジタル印刷の環境優位性を訴えたわけだが、「アンチオフセットの出展内容とはいえ、両方の良さをどう活かしていくかを考えさせられた。同時に、あれだけの廃棄物を出しても、価値のある紙製品を私たちは作らないといけない」と篠原氏。

haris & brunoは、もともと加飾の機械から出発し、今は印刷機メーカーでもある。「数ある加飾機の出展の中でも、一番インパクトがあった」という。

また、先進的な取組みの数々に篠原氏は日本との違いを考えさせられた。「1枚あたりの印刷コスト（原価）について、『0.14ユーロ』といったように表示してくれるシステムを初めて見た。ワンパスの印刷・製本ラインでは、日本なら6~7人必要なところを1人で、しかも高速で回していたのには驚いた。ヨーロッパでは日本以上に人材確保に苦勞していて、人がいなくても回せる仕組みを追求している。この会社では、マシンの故障に関する事前診断とトラブルシューティングのソフトウェアを世界で販売している。ブースでは私も実際にゴーグルを着けて、トラブル対応の作業をバーチャルで体験した。マイクロソフトと協業して開発し、機械を買うとソフトも付いてくるようだ」

PERETはオランダの計測器メーカー。同社は、エンボス・デボスの深さや、筋押しのゆがみ（対称性）を数値化する装置などを販売している。「日本では目視で行っていることがほとんど。紙の、いわゆるツノが立っているかどうかまで可視化していた。職人の勘と経験をデータ化し、入社したての社員にもわかるよう



印刷方式による廃棄物の量の違いを象徴的に表現したLandaのブース

に数字で見せているところがすごい」と感嘆していた。

Hermansで篠原氏が感じたのは、美の徹底した追究。当日の講演では画像で紹介したが、箔押しの際の再現性、クオリティが群を抜いている。彫刻版で行っていることも再現の高さの理由であるようだ。

「日本では腐食版が使われるのに対して、ヨーロッパでは環境規制により廃液が出る腐食版は使用が禁じられている。しかも、彫刻版の価格が日本市場の5分の1だった」と事情の違いを説明した。

スイスのOchsnerは、三方金、天金など書籍の箔のメーカー。インクジェットの印刷物に簡単に箔を施せる機械も出展されていた。

デザインの段階から立体物を意識して作り、6面で伝える姿勢を、篠原氏は今回ヨーロッパで強く感じたという。「ドイツの街の商店や書店でもデザイン性に優れたものが普通に売られている。日本はその点まだ足りないのではないかと指摘した。

▶ 視野を広げることに貪欲であれ

講演のまとめでは、今回のdrupa等の視察を通じて、進化と革新、視野を広げることの大切さについて考えさせられたと感想を述べ、「自分ではいろいろ見ていたつもりだったが、まだまだ視野が狭かった。大きな収穫があった。印刷・製本は、料理を盛る皿や器だと思っている。おいしい料理をもっとおいしく見せ、味わってもらうために、これからも勉強していきたい」と意欲を示した。